2020年度
自己点検・評価報告書
（文学研究科）

創価大学

基準１　理念・目的

（１）現状説明

点検・評価項目①　大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

評価の視点
○学部においては、学部、学科又は課程ごとに、研究科においては、研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の設定とその内容 ○大学の理念・目的と学部・研究科の目的の連関性

創価大学大学院学則第１条に「創価大学大学院は、創立者池田大作先生の建学の精神に基づき、学校教育法により、高度にして専門的な学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、ひろく文化の進展に寄与することを目的とする」とある。(根拠資料 1-1)。文学研究科では、この理念に沿い、以下のような理念・目的を掲げている。

文学研究科は、建学の精神にある人間主義に基づいて、人類が開発・蓄積してきた知恵や学術的知識としての文化を継承し、さらに応用・発展させて世界の平和と人類の福祉に貢献するため、文学・言語、社会学、教育学、心理学、哲学・思想、歴史など人文・社会科学系学問分野において、深い教養に裏打ちされ、グローバルな視点をもった創造的な研究者や、高度な専門的職業人を育成していくことを目的としています。(根拠資料 1-2)

さらに、理念・目的を具体化するために、以下のような教育目標を掲げている。

文学研究科は、科学技術の発展による物質的繁栄のなかで、人類の在り方そのものを問うような根源的な問題がさまざまな形で現れている現代社会において、まずそれに関する必要かつ十分な知識を修得した上で、問題の所在を明らかにし、論理的・創造的な分析・思考によって、自立的に解決を図ることができる人材の養成を目的とします。

- 博士前期課程では、有機的な連関をもたせた体系的な教育により、高い言語能力、基礎的かつ広範な専門的知識、および問題発見力・論理的思考力・創造的解決能力を養い、創造的研究者や専門的職業人を輩出する。
- 博士後期課程では、複数教員による多角的な研究論文作成指導を中心とする教育により、先端的な知識、新たな領域を開拓するような創造的思考、自立的な研究姿勢を養い、世界で活躍できる創造的研究者や、高度な専門的職業人を輩出する。(根拠資料 1-2)

点検・評価項目②　大学の理念・目的及び学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

評価の視点
○学部においては、学部、学科又は課程ごとに、研究科においては、研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の適切な明示 ○教職員、学生、社会に対する刊行物、ウェブサイト等による大学の理念・目的、学部・研究科の目的等の周知及び公表

前項で掲げた理念・目的に沿い、創価大学大学院学則、創価大学学位規則を制定した上で、人材育成その他の教育研究上の目標を、博士前期課程では専攻ごとに設けられた必修の基礎科目の授業の中で、博士後期課程では必修の研究科共通科目の授業中で、それぞれ学生に周知している。また、これらの目標は３ポリシーとして、冊子体の『創価大学大学院要覧』に掲載して本研究科の教員および学生全員に配布し、さらにホームページにおいて学生や社会に向け広く公表している。また、カリキュラム、学位論文審査基準、教員一覧、紀要（2003 年度から）、学位論文、単位互換制度等の情報も、ホームページにて開示している。（根拠資料 1-3）

（２）長所・特色

本研究科の目的は建学の精神に基づき、自立した創造的研究者と高度な専門的職業人を育成するため、語学、各研究分野の基礎的・専門的知識、および学位取得のための知識・方法をわかりやすく具体的に掲げている。また、それを関係者のみならず一般にも公開している。

（３）問題点

本研究科には多くの外国人留学生が在籍している。今後はさまざまな言語で、海外にも積極的に本学の理念を発信していく工夫が求められる。

（４）全体のまとめ

現代社会は大きく変化しており、文学研究科に対する期待も変化していくことが予想される。これに敏感に対応しながらも、他方で一貫した理念に基づく教育が必要であることもいうまでもない。このバランスのとれた姿勢を保持しつづけることに、常に留意することが重要であると考える。

【根拠資料】
1-1　『創価大学大学院要覧　2020 年度』255 頁
1-2　同上 23 頁
1-3　ウェブサイト(https://www.soka.ac.jp/grad-let/)

基準４　教育課程・学習内容

（１）現状説明

点検・評価項目①　授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

評価の視点
〇課程修了にあたって、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果を明示した学位授与方針の適切な設定（授与する学位ごと）及び公表

文学研究科では、本学の理念、および文学研究科の理念・目標に沿い、各専攻・専修ごとに以下のように詳細なディプロマ・ポリシーを掲げている。これらは、学生や社会に向けて公表している冊子体の『創価大学大学院要覧』の他、ウェブサイト(根拠資料 4-1)によって公開している。

＜英文学専攻＞

博士前期課程においては、世界文化に貢献する新しい知見を示すとともに、表現形式においても国際的水準を満たすレベルの修士論文（あるいはリサーチペーパー）の作成をめざします。論文審査に合格し本課程を修了することにより修士（英文学）が授与され、研究者のみならず、英語教育者としてさまざまな英語教育の現場において活躍する、高度な英語力を身につけた専門的職業人への道が開かれます。

博士後期課程においては、国内外の学会・研究会において学問の進歩に資する論文発表等が求められます。各専門領域において複数の指導教員のもと、広い教養を背景とした研究を進めていきます。博士論文を作成し、審査に合格することで博士（英文学）が授与され、高度な専門研究者ならびに専門職業人への道が開かれます。

＜社会学専攻＞

社会学専攻は、急速に変化する日本社会および国際社会の多様な文化的社会的諸側面を、グローバルな視野から社会科学的に調査研究し、現代のグローバル化した世界が直面する問題群の解決に寄与することのできる、高度な教養と専門的知識・分析力・技能の修得を求めます。

これらの能力や学識の修得を目指す中で、博士前期課程においては、原則として２年以上在学して 30 単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、修士論文またはリサーチペーパーを作成して、その審査および最終試験に合格した者に、修士（社会学）の学位が授与されます。

また博士後期課程においては、上記２専修を修了した者、または同等の研究経歴を有する者を対象に、学位（博士）取得をめざした研究指導を行い、創造的な学術研究者または高度な専門的職業人を育成します。原則として３年以上在学し、必要な研究指導を受けて 12 単位以上を修得した上、研究活動上の要件を満たした場合に、博士論文の執筆と提出を認め、その審査および最終試験に合格した者に、博士（社会学）の学位が授与されます。

＜教育学専攻＞

教育学専攻は、創価大学のディプロマ・ポリシーに基づき、また、教育学部のディプロマ・ポリシーを踏まえ、学位ごと、専修ごとに以下の能力や学識の修得を求め、学位授与の要件を満たす者に、博士前期課程では修士（教育学）を、博士後期課程では博士（教育学）を授与します。

博士前期課程

教育学専修

1. 教育学に関する専門的な知識と思考力を有している。
2. 教育学の研究方法を理解し、目的に応じて適切に実施できる。
3. 世界の諸問題について、教育学的見地から理解し、多様な観点から、主体的かつ協調的に問題解決できる。

臨床心理学専修

1. 心理学に関する専門的な知識と思考力を有している。
2. 心理学の研究方法を理解し、目的に応じて適切に実施できる。
3. 世界の諸問題について、心理学的見地から理解し、多様な観点から、主体的かつ協調的に問題解決できる。

博士後期課程

1. 教育学に関する高度な専門的知識と深い思考力を有している。
2. 教育学の研究方法を深く理解し、目的に応じて適切に実施できる。
3. 世界の諸問題について、教育学的見地から分析し、独創的な観点から、主体的かつ協調的に問題解決できる。

＜人文学専攻＞

人文学専攻においては、創価大学文学研究科の理念・目的、教育目標のもとに、各専修の専門領域において、高度な知識と思考力、表現力、そして各種の問題に対して主体的に取り組む創造的な学生であることを、目指しています。そのもとで、次のような学識の修得がなされていることを、学位授与の要件とします。

1. 各専修の分野における研究について、深い知識と思考力を修得していること。
2. 各専修の分野における研究において、知識をもととした学術的内容を表現する能力を修得していること。
3. 各専修の分野それぞれにおいては、次のような学識を修得していること。

・「哲学歴史学専修」においては、文化の基底ともいうべき人間自身とその行為について、全体観の上から把握考察し、理念的にまた実証的に追究できていること。

・「日本文学日本語学専修」においては、文学と語学という相互関連する学問を有機的に研究し、人間文化の研究ができていること。

・「仏教学専修」においては、アジア各地域の文化・思想に大きな影響を与えてきた仏教について、幅広い視野に立って文献学を踏まえて実証的に研究できていること。

4. 特に博士後期課程においては、研究者としての高度な研究能力の向上をはかるとともに、積極的な研究成果の発表を行っていること。

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

所定の単位修得、並びに、修士論文（またはリサーチペーパー）執筆を通じて、下記の要件を満たした者に対し、修士（教育学）の学位を授与します。

日本語教育専修では、単位取得を通じて、日本語教育・国語教育・日本語学の高度な専門知識（理論）、並びに、教育現場で言語学習者の能力育成に適切に貢献できる専門技能（応用）の両面をバランスよく習得した者であって、かつ、修士論文（リサーチペーパー）執筆を通じてそれらの専門領域における未解決の課題を自身の研鑽によって合理的に解決する実績を挙げた者に学位を授与します。

＜国際言語教育専攻・英語教育専修＞

所定の単位修得、並びに、修士論文（またはリサーチペーパー）執筆を通じて、下記の要件を満たした者に対し、修士（教育学）の学位を授与します。

国際言語教育専攻英語教育専修における４つの科目群（理論と教授法、研究方法、実習、選択科目）に属する科目を履修することにより、英語教育専修の院生は教育者として職に就く前に、その準備を広く、深く、満遍なく行うことができ、同時に自身の研究の課題も見つけます。合わせて、院生は英語教育専修が掲げる卓越した教育者になるという目標に見合うスキルだけでなく、修了後長きにわたって学び続け、さらにこの分野の発展に貢献し続けるスキルを身につけます。

点検・評価項目②　授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

評価の視点
○下記内容を備えた教育課程の編成・実施方針の設定（授与する学位ごと）及び公表 ・教育課程の体系、教育内容 ・教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等 ○教育課程の編成・実施方針と学位授与方針との適切な連関性

文学研究科では、本学の理念、および文学研究科の理念・目標・ディプロマ・ポリシーに沿い、各専攻・専修ごとに以下のようなカリキュラム・ポリシーを掲げている。これらは、学生や社会に向けて公表している冊子体の『創価大学大学院要覧』の他、ウェブサイト(根拠資料 4-2)によって公開している。なお、後述のように間接評価として「振り返りシート」を利用しているが、それについては、基準４点検評価項目⑦の記述を参考にしていただきたい。

＜英文学専攻＞

博士前期課程においては、「演習」を中心としてそれぞれの専門分野を研究します。この「演習」は、より広い視野をもてるように、専攻内であれば複数の指導教員のもとで研究することができます。選択必修科目、選択科目では、自分の研究に沿った科目を選ぶことができます．最終的には、修士論文（またはリサーチペーパー）を英語で作成します。

博士後期課程においては、それぞれの分野の「特殊研究指導」を中心に研究を進めます。専攻内であれば、複数の指導教員のもとで研究することができます。英語で博士論文の執筆を目指します。

＜社会学専攻＞

博士前期課程は、社会学研究と、グローバル・スタディーズの２領域からなり、両者の協同によって、教育・研究を進めます。

社会学研究は、社会学固有の研究方法・理論の発展を学び、現代社会の諸側面について調査研究を進め、急速に変動する現代社会における様々な課題の克服への道を探求します。

グローバル・スタディーズは、グローバル化した世界における諸文化社会の相互依存の理解と、多様な価値を有する人々が共生できる平和な国際社会の実現への方途を探求します。

本専修は、方法論科目（国際社会論、宗教社会学、文化人類学、言語研究）と地域研究（Area Studies）から構成され、地域研究としては「中国・アジア研究」「ロシア・ユーラシア研究」に重点を置いた研究指導を行います。

博士後期課程では、前期課程を修了した者、または同等の研究経歴を有する者を対象に、学位（博士）取得をめざした研究指導を行い、創造的な学術研究者または高度な専門的職業人を育成します。

なお両課程共に、研究指導の更なる充実の為に間接評価として「振り返りシート」を活用しています。修士論文および博士論文は審査基準（別表参照）を設け評価しています。そして論文指導の改善の為に直接評価として卒業論文からサンプルを抽出し、院生の到達度を測定しています。

社会学専攻は関東地域における大学院の社会学および宗教学関連の単位互換制度に加わっており、加入している諸大学院での単位取得が認められます。この制度を活用して他大学の大学院生や研究者との交流を進めるとともに、自分の専門領域の主要な学会や研究会に広く所属し、積極的に研究発表や報告を行うよう指導します。

＜教育学専攻＞

教育学専攻は、創価大学のカリキュラム・ポリシーに基づき、また、教育学部のカリキュラム・ポリシーを踏まえ、上記教育学専攻のディプロマ・ポリシーに適う学生を育成するため、学位ごと、専修ごとに以下の方針に基づいてカリキュラムを編成します。また、ディプロマ・ポリシーで掲げたラーニング・アウトカムズに対し、直接評価手法と間接評価手法を組み合わせて点検・評価するとともに、不断の努力によって教育の改善に取り組みます。

博士前期課程

教育学専修

1. 教育学の実践者や研究者を養成するために、教育学の幅広い知識と実践的能力の習得を目指します。
2. コースワークでは、知識基盤社会において必要な内容を学ぶことができるよう、教育学や教育心理学、教科教育学などに関する科目を配置します。
3. リサーチワークは、先行研究のサーベイ、および、修士論文またはリサーチペーパーの作成が中心です。それらの充実のために、振り返りシートを活用して形成的に評価するとともに、ルーブリックを用いて質的に評価します。また、2 年次春学期には中間発表会を実施し、質の向上を図ります。

臨床心理学専修

1. 臨床心理士を養成するために、心理学の幅広い知識と実践的能力の習得を目指します。
2. コースワークでは、知識基盤社会において必要な内容を学ぶことができるよう、心理学、臨床心理学に関する科目を配置します。
3. リサーチワークは、先行研究のサーベイ、および、修士論文またはリサーチペーパーの作成が中心です。それらの充実のために、振り返りシートを活用して形成的に評価するとともに、ルーブリックを用いて質的に評価します。また、2 年次春学期（6 月）と秋学期（10 月）に中間発表会を、秋学期（2 月）に修士論文発表会を実施し、質の向上を図ります。

博士後期課程

1. 教育学の研究者を養成するために、教育学に関する高度な専門的知識と深い思考力、独創的な研究力の習得を目指します。
2. コースワークでは、高度で独創的な研究力を習得できるよう、教育学や教育心理学、教科教育学などに関して専門性の高い科目（特殊研究指導）を配置します。
3. リサーチワークは、博士論文の作成が中心です。その充実のために、関連学会や国際会議での研究発表、論文誌への投稿を支援します。

＜人文学専攻＞

人文学専攻は、創価大学文学研究科の理念・目的、教育目標のもとに、以下の方針に基づいてカリキュラムを編成します。

博士前期課程

1. 各専修分野における幅広く深い知識の習得を目指します。
2. 各専修分野における学問的方法を獲得するために、少人数での指導を通した教育を行います。
3. 各専修分野における高度な専門知識の構築を目指します。
4. それぞれの科目において「振り返りシート」を作成・記入し、科目の教育目標の達成について評価し、科目内容の充実・発展に活用します。

5. 複数の教員が評価する修士論文においては、共通の審査基準を用いて評価を行います。
6. 各科目においては、直接評価法（試験や論文）と間接評価法（振り返りシート等）を組み合わせて評価すると共に、不断の努力によって教育内容の充実に取り組みます。

博士後期課程

1. 各専修分野において先端的な専門的知識の獲得ができるように、特殊研究指導を配置します。
2. 各専修分野において自立的な創造的研究者として活躍できるように、コースワークや複数教員による指導を実施します。
3. 各専修分野において世界的に通用する論文を作成できるように、学内外における論文発表、論文投稿を指導し支援します。
4. それぞれの科目において「振り返りシート」を作成・記入し、科目の教育目標の達成について評価し、科目内容の充実・発展に活用します。
5. 複数の教員が評価する修士論文においては、共通の審査基準を用いて評価を行います。
6. 各科目においては、直接評価法（試験や論文）と間接評価法（振り返りシート等）を組み合わせて評価すると共に、不断の努力によって教育内容の充実に取り組みます。

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

日本語教育専修では、

1. 日本語教育、国語教育、日本語学、言語コミュニケーションの理論分野に関する専門科目を置き、専門的学識の修得を目指します。
2. 日本語教育、国語教育現場における参与観察、実践指導を含む実践演習、並びに実習科目を置き、実践的技能の修得を目指します。
3. 日本語教育、国語教育の課題に関連する第二言語習得理論、異文化コミュニケーション、言語政策、現代日本文学研究等の学際的研究分野の関連科目を置き、幅広い観点から探究する能力の育成を目指します。
4. 日本語学、日本語教育、国語教育における最先端の学術研究を踏まえ、自身が設定した課題について調査研究を行い、修士論文（またはリサーチペーパー）の執筆へとつなげていくための演習科目を置き、学術研究能力の育成を目指します。

以上のカリキュラム・ポリシーを検証する評価方法としては、直接評価法（試験や論文）と間接評価法（振り返りシート等）を組み合わせて、学生の到達度を測定すると共に、研究指導の更なる充実を図ります。

＜国際言語教育専攻・英語教育専修＞

どの教師にとっても、学習理論は、どのように教えればよいのか、教室で起こることをどのように理解すればよいのか、学習者が目標を達成するのをどのように助けることができるのかについて考える基礎を与えます。国際言語教育専攻英語教育専修ではこうした課題について考察するため、第二言語習得理論、語用論、教授法、文法の理解と指導、社会における言語の位置、文化が言語教育と言語使用に与える影響に関する科目を配しています。これらの科目を履修することで、院生はさまざまな指導環境で効果を上げることのできる教師へと成長するための土台となる教授法、理論について広く、深く理解します。合わせて、本専修では、実践的な指導スキルを強調しますが、研究を評価・理解、応用・実行する能力を身につけることは、言語教育の分野で生産的に活躍するようになるために

不可欠です。このため院生は第二言語教育の研究方法を学びます。英語教育専修の全ての科目で、院生は英語教育における現在の研究を引用参考文献にまとめ、プレゼンテーションをし、レポート、またはプロジェクトを仕上げます。これらに基づき上記の理論や研究方法の理解を評価しています。

本専修では将来教育機関で働く院生が多いので、実践的科目群では、院生を現場で教えられるよう訓練します。実践的訓練は、実習で行われ、この過程を通して、院生は自身の指導哲学や学習者の役割とカリキュラムの関係について考察します。さらに、１セメスター（15 週間）を通して、院生は大学の英語コミュニケーション科目を担当教員と協力して教え、後に１回の授業のほぼすべてを教える機会が与えられます。院生は、担当教員から毎週講評をもらい、内容がありレベルにふさわしい活動を考案し、教案を書きます。実習については指導教案や活動の計画など複数の項目を含むルーブリック評価を実施しています。

研究に重点を置くことを望む院生は２年目に修士論文としてまとめる研究・調査を実施することができます。英語教育専修を修了する院生は将来の専門的な活動のため、研究を評価し、利用し、時に実行するスキルと自信を身につけます。２年目に、研究ではなく実践を重視するコースを選択する院生は、カリキュラム開発をプロジェクトとして行うリサーチペーパーを執筆します。どのプロジェクトにおいても、院生は英語教育におけるその問題の理論的、教育的、文化的、言語学的側面を十分に理解し、説明できることが求められます。修士論文、リサーチペーパーのいずれにおいてもルーブリック評価を導入しています。

英語教育専修の院生は全員、理論、教授法、研究、実践的経験において強固な基盤を作る必要がありますが、同時に本プログラムの中で個々の関心を追求することも奨励されます。この目的のために、院生の関心と言語教育者としての将来の目標に見合う多くの選択科目を用意しています。選択科目においても専門科目と同様、プレゼンテーション、レポートまたはプロジェクトにより評価しています。

英語教育専修ではこれらの教育課程が適切に実施されているかを確認するため、院生による授業評価、客員教員による国際的な基準に照らしての専修の教育に対する評価、現役生と卒業生による専修の教育課程全般に対する評価を依頼し、教育の質の維持・向上に努めています。

点検・評価項目③　教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

評価の視点
○各学部・研究科において適切に教育課程を編成するための措置
・教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性
・教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮
・単位制度の趣旨に沿った単位の設定
・個々の授業科目の内容及び方法
・授業科目の位置づけ（必修、選択等）
・各学位課程にふさわしい教育内容の設定
・初年次教育、高大接続への配慮（【学士課程】）

・教養教育と専門教育の適切な配置（【学士課程】）
・コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育への配慮等（【修士】【博士】）
・教育課程の編成における全学内部質保証推進組織等の関わり
○学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施

文学研究科は、人類の在り方そのものを根源的から問うような精神的・文化的・社会的問題を対象に、まずそれに関する必要かつ十分な知識を修得した上で問題の所在を明らかにし、論理的・創造的な分析・思考によって自立的に解決を図ることができるよう、教育課程を編成している。

＜博士前期課程・修士課程＞では、高い言語能力、基礎的かつ広範な専門的知識、および問題発見力・論理的思考力・創造的解決能力を養うため、有機的な連関をもたせた体系的な教育課程を編成している。すなわち、専修ごとに基礎知識・研究方法を身に着けるコースワークを設定し、その上で高度な文献読解、専門的知識の獲得、論理的創造的思考を養う外書購読、特論、演習を配置している。

＜博士後期課程＞では、複数教員による多角的な研究論文作成指導を中心とする教育により、先端的な知識、新たな領域を開拓するような創造的思考、自立的な研究姿勢を養うような教育課程を編成している。すなわち、文学研究科全体を対象としたコースワークである特別研究指導を設置して自立した研究者としての態度・心構えおよび他領域の研究方法や知識を習得した上で、専攻ごとに全教員が論文指導に関わるような体制を構築し、特殊研究指導によって指導教員が深く専門分野について指導するという編成をとっている。

これらの編成方針は、基本的には学位に対応した専攻の教員が鋭意検討しているが、コースワークなど専攻をまたぐものもあるので、これは研究科長の下で大学院委員会において検討し、研究科委員会全体の承認を経て全学的な委員会に提出している。

各専攻・専修の具体的な編成方針は、以下の通りである。

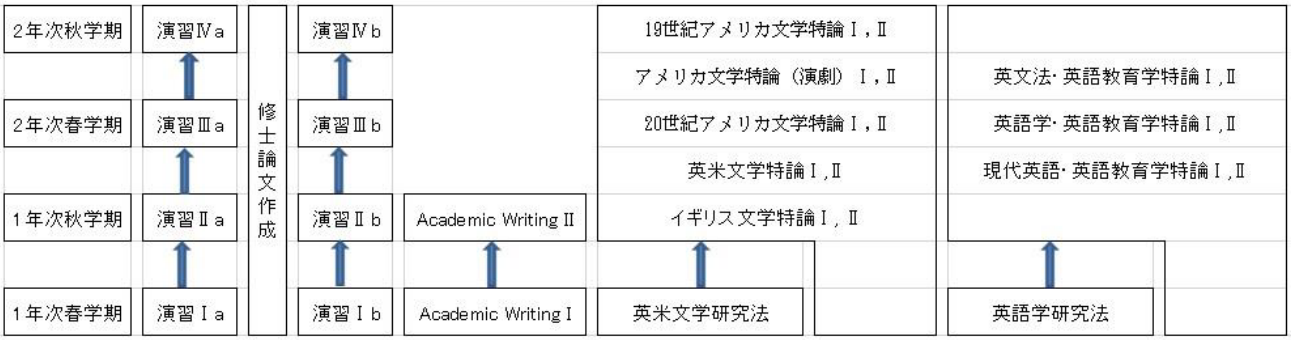
＜英文学専攻＞

英語英米文学専修という専修名が表しているように、英米文学・英語学のどちらか一方に偏ることなく、オールラウンドな視点に立って研究することができるよう授業科目を編成している。英米文学関係では、詩、小説、演劇の各分野を総合的に研究する。文学研究はまず、個々の作品の原典そのものの精読を基本とし、歴史的、文化的、社会的な側面との関連を視野に入れ、さまざまな文献資料を駆使しながら分析力、構想力などを養う。その上で論文発表、学会発表など成果をあげるよう指導する。英語学関係では、英語学研究の大きな流れを把握し、学生の関心を考慮しつつ進めていく。文献等の精読を基本として、出来る限り英語と日本語との対応にも目を向け、議論を通じて、理解し、分析し、構成する力を高めていく。

より具体的には、博士前期課程では、1年次に「Academic Writing I,II」で英語による論文執筆を見据えた指導をすると共に、英米文学関係では「英米文学研究法」、英語学関係では「英語 学研究法」で研究の基本的な方法論や姿勢について指導する。一方で、それぞれの研究分野に従って主たる指導教員を定め、その教員の演習を「演習Ⅰa,Ⅱa,Ⅲa,Ⅳa」として履修してもらうが、そこで二年を掛けて修士論文の作成に向けて指導していく。また、英米文学・英語学にかかわらずオールラウンドな視点に立って研究することができるよう、「イギリス文学特論Ⅰ,Ⅱ」「英米文学特論Ⅰ,Ⅱ」「19 世紀アメリカ文学特論Ⅰ,Ⅱ」「アメリカ文学特論（演劇）Ⅰ,Ⅱ」「20 世紀アメリカ文学特論Ⅰ,Ⅱ」「英

文法・英語教育学特論Ⅰ,Ⅱ」「英語学・英語教育学特論Ⅰ,Ⅱ」「現代英語・英語教育学特論Ⅰ,Ⅱ」の選択科目を通じて指導する他、主たる指導教員とは別の教員の演習 2 を「演習Ⅰb, Ⅱb, Ⅲb, Ⅳb」として履修させることで、多角的な指導を確保する仕組みを作っている。

博士前期課程のカリキュラム・マップ



また、博士後期課程では、文学研究科共通で「研究特別指導」を置いている他、専攻として「特殊研究指導Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」を通じ、研究内容はもちろん進捗状況等にも目配りしつつ、博士論文作成に向けた指導をしていく。各人の研究テーマに合わせて「19 世紀アメリカ文学特殊研究指導Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」「アメリカ文学特殊研究指導(演劇) Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」「20 世紀アメリカ文学特殊研究指導Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」「英米文学特殊研究指導Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」「英語学・英語教育学特殊研究指導Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」「比較言語文化論特殊研究指導Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」「英文法・英語教育学特殊研究指導Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」「現代英語・英語教育学特殊研究指導Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ」と、多角的な研究ができるよう科目を配置している。

＜社会学専攻＞

社会学は、社会科学がカバーするあらゆる領域を対象とし、さらに哲学や歴史学など人文科学の領域にかかわる研究動向からも強い影響を受ける。また、グローバル化によって、従来には存在しない新しい問題群に向き合う必要性も生まれ、こんにちの社会学は研究対象が以前にも増して幅広いものとなっている。《社会学専攻》に開設したグローバル・スタディーズ専修では、これらの時代的要請に応えることができるように、体系的に研究が進められるようにしている。まず研究の基礎となる学術的知識・方法の学習が大切と考え、「社会学基礎論」と「グローバル・スタディーズ基礎論」を必修としている。また大学院生の研究の方向性に柔軟に対応するため「社会学研究法」と「グローバル・スタディーズ研究法」を選択必修としている。そのうえに、各セメスターにおける「演習」の必修を中心に、学生が研究目的に応じた選択科目を履修できるように科目を配置している。これらの科目履修を基礎として、各自の研究テーマに基づいて修士論文（ あるいはリサーチペーパー） を作成する。

＜教育学専攻＞

教育学専修では、博士前期課程においては、教育学原典購読と教育学研究法を通して教育学の基盤を学びつつ、教育方法学、教育行財政学、比較国際教育学、教育工学などの領域の他、国語教育論、算数教育論、社会科教育論などの教科教育についても、特論を通して探求できるように科目を配置している。また、演習では 2 人の教員の科目を履修することとし、専門性を深めつつも、他の領域にも目を向けることができるように配慮している。博士後期課程においては、演習において、博士論文作成

を目指し、各自のテーマに基づき研究の進捗状況の検討、内容の精査を行っている。博士論文という大きなテーマのもとで複数の研究を統合するために、俯瞰的な視点を持ち、学術的・社会的な意義について常に精査することにより、高度な専門性を有する研究者養成を目指している。また、教育学の分野では、文献研究を基盤とすることが多いことから、当該分野のみならず、関連する領域についても見識を深めることを重視している。臨床心理学の分野では、質的データを扱うことが多いため、客観的な検証に耐えうるデータの収集、分析、解釈が妥当になされているか、徹底して検討している。臨床心理学専修では、臨床心理士としての実践力を身につけられるよう、臨床心理学の特論演習を通して基礎力を高めつつ、面接法や査定法、投影法、心理統計法、人格心理、発達臨床心理、精神医学などを通して、臨床心理学の知見を広げられるように科目を配置している。実習科目（臨床心理基礎実習、臨床心理実習）では、座学で学んだ知識をもとに教育や医療機関等の現場で児童・生徒や病院の患者と接することにより、心理援助職としての態度、心構えを身につける。また、附属心理教育相談室において、スーパーバイザー（指導教員及び指導相談員）の指導のもと、学外の来談者に対してカウンセリングを行う。その内容については、各回で録音した面接内容を逐語にし、スーパーバイザーの指導を受けるとともに、臨床心理実習Ⅰ、II において院生、教員全員で事例検討を行い、事例理解と自己理解を深め、心理援助職としての資質向上、涵養に努めている。

＜人文学専攻＞

哲学歴史学専修・日本文学日本語学専修・仏教学専修の３専修において、博士前期課程においては、各専修の基礎科目として、当該専修の導入となる研究法２単位を必修の基礎科目として設置している。さらに選択必修の基礎科目として、哲学歴史学専修では、英語・フランス語・ドイツ語・中国語の「外書研究」の科目を設置しており、日本文学日本語学専修では、「日本文学文献研究」「日本語学文献研究」の科目、仏教学専修では、サンスクリット語・仏教梵語・中国語・日本語古文書の「仏教文献講読」の科目を設置している。そして、各専修の先進的学術成果を学ぶ専門科目として、選択必修の特論科目を設置している。また、リサーチ能力や社会的・職業的自立を図ることを含め、２年間にわたって専門の領域を継続的に学ぶために、「人文学演習Ⅰ～Ⅳ」の科目を必修科目として設置している。

＜国際言語教育専攻＞

本専攻は第２言語習得という国際化に対応した教育者を養成する目的のもと、「日本語教育専修」と「英語教育専修」の２つの専修を持っている。両者ともに、優れた言語教育者の育成という観点から、理論・実践・研究においてスキルアップ、レベルアップできる能力を身につけるという教育課程の編成・実施方針に基づき教育内容を提供している。

＜日本語教育専修＞

日本語教育専修では、日本語教育や日本語研究における基礎理論や基礎知識を修得するための「基礎科目」、それらの諸問題を解決するための調査・研究を進める「演習科目（研究指導）」、日本語教育の実践を前提にした「演習科目（実践演習）」と日本語教育を実践する「実習科目」、その他日本語教育に関わるコミュニケーション理論や語彙・表現、教材研究などの「専門科目」を設けている。「基礎科目」にある「第二言語習得理論Ⅰ、Ⅱ」４単位、「日本語教育研究法Ⅰ、Ⅱ」４単位、「日本語教授法Ⅰ、Ⅱ」４単位の計１２単位は全て必修である。そのうち「日本語教授法Ⅰ、Ⅱ」は、初級から上級にわたる代表的な日本語教科書の分析と教授法を学ぶ概論科目であり、「日本語教育研究法

Ⅰ 、Ⅱ 」は日本語教育分野の基礎理論と応用的な研究を主に文献講読を通して学び、理解力や批評力を養う。また、多様な研究テーマと具体的な研究方法を学ぶことができる。「演習科目（実践演習）」に設けられている「日本語教授法実践演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 」では、初級・中級・上級の日本語授業の参与観察に基づき、レベル別の教授法を学ぶこととなっている。そして、「実習科目」にある「日本語教育実習」は学内の日本語・日本文化センターで、「海外日本語教育実習Ⅰ ・Ⅱ 」は海外の大学で、実際に日本語教育を行うものである。

＜英語教育専修＞

英語教育専修では必修科目（8 科目 16 単位、これらには演習科目 2 科目 4 単位が含まれる）、選択必修科目（3 科目 6 単位中 2 科目 4 単位を必修とする。いずれも内容は研究指導である）、選択科目（15 科目 30 単位）を用意している。言語教育に関する理論については必修科目中の Principles of Second Language Acquisition I/II, Sociolinguistics and Education, さらに選択科目の Study of Communication, Language and Culture in EFL Education などにより学ぶ。実践については必修科目の Second Language Teaching Methodology I, II を土台に Practicum in TESOL I, II において実際に大学レベルの英語科目において指導を経験する。研究については選択科目の Research Methods in Second Language Education において量的・質的双方に渡る研究方法を学び、選択必修科目の Research Proposal Writing in the Social Sciences にて研究トピックを選定し深化させる。続いて Master’s Thesis in TESOL または Research Paper in TESOL で研究指導を受け論文を仕上げる。英語教育専修では、上記のように理論・実践・研究それぞれに関わる科目を配することで、バランスの取れた言語教育者、研究者を育成することに努めている。

点検・評価項目④　学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

評価の視点
○各学部・研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置
・各学位課程の特性に応じた単位の実質化を図るための措置（１年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定等）
・シラバスの内容（授業の目的、到達目標、学習成果の指標、授業内容及び方法、授業計画、授業準備のための指示、成績評価方法及び基準等の明示）及び実施（授業内容とシラバスとの整合性の確保等）
・学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法
・適切な履修指導の実施
・授業形態に配慮した１授業あたりの学生数（【学士】）
・研究指導計画（研究指導の内容及び方法、年間スケジュール）の明示とそれに基づく研究指導の実施（【修士】【博士】）
・各学部・研究科における教育の実施にあたっての全学内部質保証推進組織等の関わり

本研究科の各専攻では、学習活性化のため以下のような措置を講じている（根拠資料 4-3）。なお、2020 年度に関しては、covid-19 の影響で多くの授業ではオンライン授業を実施した。その結果、従来と同様の教育を施すことができた。

1　研究指導計画の明示

専攻・専修ごとに、研究指導の内容及び方法、年間スケジュールを記した研究指導計画を作成し、冊子体の『大学院要覧』およびホームページ上で明示している。

2　研究指導計画書の提出

全体的な研究指導計画とは別に、毎学期、学生は指導教員と相談の上、研究計画書を研究科長あてに提出する。これによって、研究の質を高めるとともに、自らの研究の方向を自覚する。なお、履修科目も指導教員と相談した上で効率的に決定する。

3　GPA の活用

通算 GPA2. 5 以上でなければ、学位論文が提出できないことになっている。

4　指導教員

「主指導教員」「副指導教員」各 1 名の合計 2 名とする（ 人文学専攻を除く）。

5　他研究科科目の履修

指導教授等の承認を得て、他の研究科・専攻、他大学の授業科目を、担当者の許可を受けて 10 単位以内で修得することができる。

6　履修単位数制限

各セメスター、12 単位を原則とする。

7　シラバス

シラバスは、学部同様にポータルサイトで公開されている。そこには、講義の目的、到達目標、毎回の授業内容及び課題、授業計画、成績評価の方法・基準等が統一された書式を用いて明記されている。英語科目についても日英両言語で併記でき、英語シラバスの充実が図られている。これにより、学生は講義に対する十分な理解をしたうえで、学習に臨むことができると考えている。

8　学位論文中間報告

博士論文執筆予定者は、研究科の全教員を対象にして中間報告をしなければならない。また、各専攻・専修では、博士前期課程・修士課程の学生を専攻・専修全体で指導するため、修士論文中間報告発表会を開催している。例えば、

＜教育学専攻＞

教育学専修では、全ての教員と学生が参加して 2 年次の 7 月下旬に修士論文の中間発表会を実施している。発表と質疑応答を通して、2 年生は、自身の研究の妥当性や進捗状況を確認するとともに、指導教員とは異なる分野の考え方やアプローチを学ぶことができる。また、1 年生は、発表と質疑応答のあり方や研究の進め方について、実例を通して学ぶことができ、教育上の効果が見込まれる。

臨床心理学専修では、教育学専修と同様の中間発表会を、2 年次の 6 月ならびに 10 月に実施している。さらに修了前の 3 月頃、修士論文発表会を全教員・学生の参加で実施し、学生の総合的考察力ならびにプレゼンテーション力の一層の育成を図っている。会の運営を 1 年生が担うことで、学術的な実践力の向上につなげている。加えて、臨床心理学の知見の深化と実践力の向上のために、臨床心理基礎実習や臨床心理実習などの科目を通じて、知識の確かな習得や総合的な検討力の強化を図るとともに、仕事に従事していくことについての生産的な自己検討を促している。具体的には、心理教育相談室でのケースの担当や陪席体験を通したケースマネジメント力の涵養、毎週 2 時間（年間 30 回）のケースカンファレンスを通した言語化能力とケース分析力の育成、病院実習（10 か月間、毎週 1 日）での現場に則した指導が挙げられる。

＜人文学専攻＞

毎年秋に修士論文執筆予定者全員が、全教員・全学生(学部生も含む)の前で発表し、質疑応答する。

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

日本語教育専修では「院生発表会」を年に３～４回実施している。発表会は、修士論文の作成段階に従って、1 年生は「構想発表」、2 年生は「中間発表」並びに修士論文提出 2 か月前に「直前発表」を行い、専任教員全員そして院生全員が出席し講評並びに質疑応答が行われる。また、会の運営は 1 年生が担う。

点検・評価項目⑤　成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

評価の視点
○成績評価及び単位認定を適切に行うための措置
・単位制度の趣旨に基づく単位認定
・既修得単位等の適切な認定
・成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置
・卒業・修了要件の明示
・成績評価及び単位認定に関わる全学的なルールの設定その他全学内部質保証推進組織等の関わり
○学位授与を適切に行うための措置
・学位論文審査がある場合、学位論文審査基準の明示・公表
・学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置
・学位授与に係る責任体制及び手続の明示
・適切な学位授与
・学位授与に関わる全学的なルールの設定その他全学内部質保証推進組織等の関わり

１　成績評価

成績は創価大学大学院学則に則り、厳格に行っている。(根拠資料 4-4)

２　学位論文提出の条件の設定

学位論文の様式などは創価大学大学院学則に則り、厳格に運用している。これは『創価大学大学院要覧』に公開している。(根拠資料 4-5)

また、博士論文提出に至る過程および提出の条件を明確にし、博士学位認定の客観性、厳格性を高めた。具体的には、以下の通りである。

（１）審査の過程における公開の「博士論文資格審査会」を文学研究科として開催する。

（２）「博士論文資格審査会」での質疑を経て、博士論文提出者の十分な学力、および博士論文としての審査基準を満たしうると認定された者を、「博士学位請求論文提出資格者」(Ph.D. Candidate) とする。

（３）学位論文を提出前には、次の a または b の条件を満たすこと。

a 国際的または全国規模の学会・研究会等の学会誌、またはそれに準ずる学術刊行物に、査読を経た研究論文を１本以上掲載、または掲載が決定していること。

b 国際的または全国規模の学会・研究会等において、２回以上の口頭発表を行なう。かつ大学等研究機関の雑誌・紀要等に、研究論文を１本以上掲載、または掲載が決定していること。

（４）上記資格者が完成した「博士学位請求論文」が提出された場合、受理検討委員会を研究科長の下に組織し、受理の可否を検討する。

（５）受理検討委員会から受理相当との報告があった場合、研究科委員会の議を経て主査１名、副査２名の審査委員会を設置し審査に入る。副査のうち、なるべく１名は外部の方に依頼するようにする。

（６）審査委員会は、論文内容の審査、提出要件の検討を経て、提出者との最終試験を行い、審査結果を研究科委員会に報告する。

３　学位論文審査項目と審査基準

文学研究科の博士前期課程・修士課程における修士論文審査においては、専攻・専修ごとに数項目の審査基準とその点数を明示している。博士論文審査においては、審査基準を明示している。（根拠資料 4-6）

具体的には以下の通りである。

＜英文学専攻＞

【修士論文審査基準】（100 点満点）

1. 文章は明晰に書かれているか？（30 点）
2. 論文の問いが明瞭かつ適切に立てられているか？（10 点）
3. 先行研究が十分に行われているか？（10 点）
4. 立てられた問いに対する解答（結論）が与えられているか？（10 点）
5. 結論が論理的に導き出されているか？（10 点）
6. 研究・分析方法は的確か？（10 点）
7. 構成および章立ては適切か？（10 点）
8. 適切な引用がなされているか？（10 点）

【リサーチペーパー審査基準】（100 点満点）

1. 研究または調査の目的が明瞭であるか？（20 点）
2. 研究結果または調査結果が十分に明示されているか？（20 点）
3. 研究・分析方法は的確か？（20 点）
4. 構成および章立ては適切か？（20 点）
5. 文章は明晰に書かれているか？（20 点）

【博士論文（課程による）審査基準】

以下の諸点を考慮して総合的に判断する。

1. テーマの独創性とその意義の明示
2. 当該学問領域への貢献
3. 先行研究の分析と評価
4. 論文構成の適切さ
5. 内容および文章の論理性および明晰さ
6. 文献使用の適切さおよび読解の正確さ
7. 註および参照文献の適切さおよび充実度

8. 提出論文に対する自己分析および今後の展望等

※ 執筆言語は英語

＜社会学専攻＞

【修士論文審査基準】（100 点満点）

1. 論文の問いが明瞭かつ適切に立てられているか？（10 点）
2. 先行研究が十分に行われているか？（20 点）
3. 立てられた問いに対する解答（結論）が与えられているか？（10 点）
4. 結論が論理的に導き出されているか？（20 点）
5. 研究・分析方法は的確か？（10 点）
6. 構成および章立ては適切か？（10 点）
7. 文章は明晰に書かれているか？（10 点）
8. 適切な引用がなされているか？（10 点）

【リサーチペーパー審査基準】（100 点満点）

1. 研究または調査の目的が明瞭であるか？（20 点）
2. 研究結果または調査結果が十分に明示されているか？（20 点）
3. 研究・分析方法は的確か？（20 点）
4. 構成および章立ては適切か？（20 点）
5. 文章は明晰に書かれているか？（20 点）

※ 分量や言語等の制限については『大学院要覧Ｐ226』を参照のこと。

【博士論文（課程による）審査基準】

以下の諸点を考慮して総合的に判断する。

1. テーマの独創性とその意義の明示
2. 当該学問領域への貢献
3. 先行研究の分析と評価
4. 論文構成の適切さ
5. 内容および文章の論理性および明晰さ
6. 文献使用の適切さおよび読解の正確さ
7. 註および参照文献の適切さおよび充実度
8. 提出論文に対する自己分析および今後の展望等

＜教育学専攻＞

【修士論文・教育学専修】（各項目 25 点、合計 100 点）

1. （問題、目的、方法） 研究における問題意識が明瞭であり、目的に応じた方法がとられているか。
2. （先行研究、独創性および発展性） 先行研究への理解をもち、論文に独創性があり、また発展性を含むものであるか。
3. （論理構成、充実性） 章立てや、展開が論理的になされ、内容的にも充実しているか。
4. （文献・資料、引用等） 文献や資料への理解をもち、引用や注記の仕方、参考文献の表示などがルールに則ったものであるか。

【修士論文・臨床心理学専修】（合計 100 点）

1. （問題、目的、方法） 研究における問題意識が明瞭であり、目的に応じた方法がとられているか。（20 点）
2. （先行研究、独創性および発展性） 先行研究への理解をもち、論文に独創性があり、また発展性を含むものであるか。（30 点）
3. （論理構成、充実性） 章立てや、展開が論理的になされ、内容的にも充実しているか。（30 点）
4. （文献・資料、引用等） 文献や資料への理解をもち、引用や注記の仕方、参考文献の表示などがルールに則ったものであるか。（10 点）
5. 研究方法や研究対象に関する倫理的配慮（10 点）

【博士論文（課程による）審査基準】

以下の項目を審査して、総合的に可否を判断する。

1. テーマの独創性とその意義の明示
2. 先行研究の分析と評価
3. 論文構成（章立てを含む構成全般）の適切さおよび充実度
4. 内容および文章の論理性および明晰さ
5. 文献（外国語文献、種々の資料等）使用の適切さおよび読解の正確さ
6. 註および参考文献の適切さおよび充実度
7. 提出論文に対する自己分析および今後の展望等

＜人文学専攻＞

【修士論文（リサーチペーパーを含む）審査基準】（各項目 25 点、合計 100 点）

1. （問題、目的、方法） 研究における問題意識が明瞭であり、目的に応じた方法がとられているか。
2. （先行研究、独創性および発展性） 先行研究への理解をもち、論文に独創性があり、また発展性を含むものであるか。
3. （論理構成、充実性） 章立てや、展開が論理的になされ、内容的にも充実しているか。
4. （文献・資料、引用等） 文献や資料への理解をもち、引用や注記の仕方、参考文献の表示などがルールに則ったものであるか。

【博士論文（課程による）審査基準】

以下の項目を審査して、総合的に可否を判断する。

1. テーマの独創性とその意義の明示
2. 先行研究の分析と評価
3. 論文構成（章立てを含む構成全般）の適切さおよび充実度
4. 内容および文章の論理性および明晰さ
5. 文献（外国語文献、種々の資料等）使用の適切さおよび読解の正確さ
6. 註および参考文献の適切さおよび充実度
7. 提出論文に対する自己分析および今後の展望等

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

【修士論文（リサーチペーパーを含む）審査基準】（各項目 20 点満点×５＝100 点満点）

1. 研究の問い・目的・方法

   研究の問い・目的が明瞭かつ的確に述べられており、研究方法も適切である。

2. 先行研究の把握

先行研究の把握が的確かつ十分で、研究テーマとの関連づけが明確である。

3. 論理構成

章立て、論述の展開、結論づけが明確かつ論理的で、得られた成果に対する解釈も適切である。

4. 独創性・創造性

考察の観点や成果が独創的、創造的であり、将来の研究に貢献をする可能性がある。

5. 言語表現と形式

明晰かつ適切な言語表現が用いられ、引用方式、書式、図表、参考文献など、形式面もルールに則っている。

＜国際言語教育専攻・英語教育専修＞

【修士論文審査基準】（各項目 25 点満点×６＝150 点満点）

I. 序論

問題の所在をより広い教育的・社会的文脈の中で捉えつつ、中心となる研究課題と分析方法を明確に述べている。

II. 先行研究

関連する先行研究の目的、サンプル、主要な結果、欠点を適切に要約しており、その分野に関し十分な知識を有していることを示している。未解決の課題を明らかにしながら、研究の枠組みを合理的に構築している。

III. 研究の問い

明らかになった未解決の問題につき、研究の対象と限界を適切に示しながら研究の問いを立てている。

IV. 研究方法

予備調査（必要とされる場合）、データ収集方法を含め、適切なデータ分析方法を適用し、統計分析（必要とされる場合）を用い、結果を批判的に評価している。

V. 結果と結論

研究の問いに言及しつつ、現在の理論と実践に照らしながら、結果と結論を明確に論理的に述べている。適切な一般化が成され、今後取り組むべき研究課題にも言及している。

VI. 形式とスタイル

APA スタイルに準拠しつつ、先行研究、仮定、推奨事項には出典や引用が適切に成されている。研究に独創性があり、考察を斬新な方法で提示している。

【リサーチペーパー審査基準】（各項目 25 点満点×６＝150 点満点）

I. 序論

扱う課題を適切に述べ、より広い教育的文脈におきつつその重要性と目的を述べている。

II. 先行研究

関連する先行研究に基づき、教育的文脈を明らかにしながら、言語及び指導上の諸問題に触れ、対象とする教育的課題・問題を詳述している。

III. ニーズ及び状況分析

先行研究の結果明らかになった懸案事項を反映しながら、学習者のニーズと特定の教育的状況の

分析を行っている。

IV. プログラムの開発

先行研究に適切に関連づけながら、特定の文脈での実行可能性、シラバスと教材、指導法や活動を、評価の方法と共に示している。

V. 結果と推奨事項

開発したプログラムの長所と限界が示されている。学校や国レベルでの実施に際しての助言に加え、今後想定されるプログラムの改良について提案が成されている。

VI. 形式とスタイル

APA スタイルに準拠しつつ、先行研究、仮定、推奨事項には出典や引用が適切に成されている。開発されたプログラムには深い分析が含まれ、教育的課題に創造的に取り組んでいる。制約と限界を認識しつつも、明確であり、かつ焦点が絞られ、独創的である。

点検・評価項目⑥　学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

評価の視点
○各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定（特に専門的な職業との関連性が強いものにあっては、当該職業を担うのに必要な能力の修得状況を適切に把握できるもの。）
○学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握及び評価するための方法の開発
≪学習成果の測定方法例≫
・アセスメント・テスト
・ルーブリックを活用した測定
・学習成果の測定を目的とした学生調査
・卒業生、就職先への意見聴取
○学習成果の把握及び評価の取り組みに対する全学内部質保証推進組織等の関わり

本研究科では、2018 年度に「文学研究科においては、各専門科目の成績、および修士論文、リサーチペーパー、博士論文を通して、学修成果の達成状況を評価します。文学研究科各専攻・専修が掲げるディプロマ・ポリシーをアセスメント項目とし、それに対するアセスメント指標を明示することで、各専攻学生がその能力を身につけることができたかどうかを評価します」とのアセスメントポリシーを作成し、さらに専攻ごとに「アセスメント項目」、「アセスメント指標」を作成して公開し、学習成果の測定及び可視化を推進してきている。（根拠資料 4-7）さらに、その結果について点検・評価を行い、教育改善につなげる PDCA サイクルを構築するよう努めている。すなわち、各専攻・専修の基幹的で継続的に開講される科目を中心に、各アセスメント項目にそった形の科目ルーブリックを作成し実行している。そして、その結果を文学研究科評価分科会において議論し、学生指導や教育課程の編成に反映しつつある。なお、科目ルーブリックは科目ごとに異なるが、博士後期課程の共通必修科目「研究特別指導」を例に挙げれば、以下の通りである。

＜研究特別指導　アセスメントポリシーに基づく学習成果の判定及び可視化を促進する上での科目ルーブリック＞

アセスメント項目	A	B	C	D	回答
文系研究者としてふさわしい研究の方法や研究の姿勢について、十分に修得していること	文系分野の研究方法を十分に修得している	AとCの中間である	文系分野の研究方法をある程度修得している	文系分野の研究方法をあまり理解していない	
	文系分野の研究者としての心構えを十分に修得している	AとCの中間である	文系分野の研究者としての心構えをある程度理解している	文系分野の研究者としての心構えをあまり理解していない	
博士論文作成までの過程について、十分に理解していること	博士論文というものについて十分に修得している	AとCの中間である	博士論文とういものについてある程度理解している	博士論文とういものについてあまり理解していない	
	博士論文作成までの研究計画を適切に作成している	AとCの中間である	博士論文作成までの研究計画を作成している	博士論文作成までの研究計画を立てていない	

また、学生が参加した文学研究科評価分科会を開催し、教育課程についての学生の意見を聴取し、活発な意見の交換が行われている。

以上は各専攻・専修で共通で実施しているが、そのほかに、各専攻・専修でも独自に行っている。例えば、以下の通りである。

＜教育学専攻＞

基幹科目である教育学原典購読、教育学研究法、教育学演習（Ia, Ib, IIa, IIb, IIIa, IVa)、臨床心理学特論（I, II)、臨床心理学特論演習（I-1, II-1, I-2, II-2）について、セメスター終了時に自身の学習を振り返り、アセスメントポリシーに基づいたルーブリックを用いて自己評価する機会を設けている。これにより、授業科目の単位をただ修得して終わりとするのではなく、学んだ内容を再確認するとともにその到達度を自己分析し、自身の学びを補強したり、分野･領域内外の他の学びへとつなげたりすることができる。

＜国際言語教育専攻・英語教育専修(TESOL)＞

アセスメントポリシーは以下の通りである。

TESOL Program Assessment Policy

There are two aspects to the assessment policy: Course work and Research

For courses, there are four Core Classes. For assessment, we can use the average of GPA scores.

In addition, students must complete the practicum course that is based on the following rubric:

Each section has more detailed items and each item is based on the following scoring system.

1: Unsatisfactory 2: Sufficient 3: Satisfactory 4: Good 5: Exceptional

Practicum Evaluation sections:

1. Classroom Practice

2. Interaction with Students
3. Student Evaluation and Assessment
4. Lesson Planning and Curriculum (Activities) Design
5. Reflection and Self-Assessment
6. Overall Practicum Performance

Overall Practicum Evaluation Grade: F U S C B A

For research, there are three possible ways to meet this requirement: Teaching & Learning Project, Research Thesis, Research Paper. The following rubrics are used depending on the student's project.

Teaching & Learning Project

Each item within each section is scored on a scale of 5, and is based on a total score of 100 points.

1. Introduction
2. Literature Review
3. Needs & Situational Analysis
4. Course, curricular or program planning and/or revision
5. Course, curricular or program evaluation
6. Graduate Student Review
7. Presentation and Language
8. Overall Project

1: Unsatisfactory 2: Sufficient 3: Satisfactory 4: Good 5: Exceptional

Research Thesis

Each item within each section is scored on a scale of 3 or 4, and is based on a total score of 100 points.

1. Introduction
2. Research Questions/hypothesis
3. Literature Review
4. Methodology and Analysis
5. Findings and Conclusions
6. Presentation and Language
7. Scientific Thinking (Originality)

*1: Unsatisfactory 2: Sufficient 3: Satisfactory 4: Exceptional

*1: Unsatisfactory 2: Satisfactory 3: Exceptional

Research Paper

This is a new part of the program that involves limited research and additional course work. The course work uses the Average GPA scores while the research paper will use the following rubric:

Each item within each section is scored on a scale of 3 or 4, and is based on a total score of 100 points.

1. Introduction
2. Research Questions/hypothesis
3. Literature Review

*1: Unsatisfactory 2: Sufficient 3: Satisfactory 4: Exceptional

*1: Unsatisfactory 2: Satisfactory 3: Exceptional

点検・評価項目⑦　教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点
○適切な根拠（資料、情報）に基づく定期的な点検・評価
・学習成果の測定結果の適切な活用
○点検・評価結果に基づく改善・向上

文学研究科では、以前から各学期の終了時点ですべての学生に「授業振り返りシート」を配布、またはネット上で配信し、授業に対する意見や評価を回答させている。「授業の到達目標は達成されたと思いますか」「専門的知識は身についたと思いますか」「研究におけるスキルは身についたと思いますか」「学習意欲は増しましたか」の 4 項目について「そう思う」から「そう思わない」まで 5 段階で評価する形式になっている。2020 年度春学期では実施率が 100%となっている。

さらに、2018 年度からは本格的にルーブリック用紙の配布(前掲の科目ルーブリック参照)、およびネット上でのアンケート調査の実施を行ってきた。アンケートは具体的には次のようなものである。

文学研究科 授業改善に関する意見

創価大学は、大学院で教育を受ける中で感じた意見を学生に伺いたいと考えています。肯定的な意見、建設的な批判的な意見、何でも構いません。ご意見は匿名で募集致します。ご意見がある学生は、期日までの本アンケートの回答をお願い致します。

質問１

所属する専攻・専修であなたがこれまで受けてきた大学院教育について、学問的レベルや系統性、授業、施設、学生サポートについて感じたことをお書きください。

質問２

その他大学院でこれまでに教育を受ける中で感じたご意見があれば自由にお書きください。

これらの活動を担っているのが、文学研究科長を委員長とし、各専攻専修から選出された委員で構成される文学研究科自己点検評価分科会である。同分科会は点検評価の企画と実施を行い、さらにその集計結

果を各教員にフィードバックするとともに、それを分析して授業改善への意見を取りまとめている。その活動状況は以下の通りである。

＜2018 年度の活動＞

3 回の評価分科会を開催し、アセスメントポリシーの項目・指標、アセスメントプラン、ルーブリック・アンケート項目を検討した。その上で、同年 12 月にはルーブリック用紙の配布とのアンケート調査を実施し、翌年 2 月の評価分科会を開催した。

この結果、

1　ルーブリックで ABCD 4 段階評価の基準の統一

2　院生記入のルーブリックの ABCD 評価と、教員側が作成する GPA の ABCD 評価の関係性

3　アンケートに対する日本人学生と留学生の感覚の違い

4　学生数が少ない科目でどのように実施方法

5　新たな測定対象の検討(シュリーマン賞数・TOEIC 点数・卒業生進路・学会報告・論文本数)

＜2019 年度の活動＞

3 回の評価分科会を開催し、自己点検・評価活動の方針、ルーブリックを実施する科目の選定などを検討した。その上で、同年 12 月にはルーブリック用紙の配布とアンケート調査を実施し、翌年 2 月の評価分科会を開催した。また、12 月 12 日に学生を含めた評価分科会を開催(学生側出席者 3 名)した。

以上の結果、学生からの要望としては、

・専攻・専修間の関係をもう少し緩やかにしてほしい

・別の学問領域の教員を補充してほしい

などがあった。従来の「授業振り返りシート」では十分に伝わらなかった学生の声が明らかになった。

＜2020 年度の活動＞

残念ながら、コロナ禍という状況のため十分に活動しえたとはいえない。それでも、オンラインによる 5 回の評価分科会を開催、授業振り返りシート・科目ルーブリック・アンケート調査の実施、学生を交えた評価分科会の開催など、可能なものは行った。

以上の他、各専攻・専修が独自にも定期的な点検・評価を行っている。以下は教育学専攻臨床心理学専修の場合である。

＜教育学専攻＞

臨床心理学専修では、臨床心理士資格認定協会が求めている条件（臨床心理士養成機関として教育の質が担保されているか、教員数、設備等が適切かなど）を満たしているかどうかについて、数年ごとに専攻主任が書類を作成、提出し、監査を受けており、客観的な評価基準に基づいた点検が定期的に行われている。

（2）長所・特色

文学研究科は幅広い研究分野から構成されており、共通性という点では困難な面もあるが、逆にこの特徴を生かしより柔軟で学際的な研究ができるように、コースワークを設定したり学位審査過程を変更するなどに努めている。全体としては、専攻・専修の目的・設置科目・評価方法などが整合的に定められ、効率的に運用されていると考えている。

（３）問題点

しかし、以下のような問題点も指摘できよう。第１は、例えば点検・評価項目③について、外部評価委員からは「各学位課程にふさわしい授業科目の具体的な例示について、専攻ごとに記述のばらつきがみられる。」との指摘を受けている。確かに指摘通りであるが、学生数の少ない専攻・専修では十分にカリキュラムが練られていないところもある。今後、改善に努力するつもりである。

第２に、やはり外部評価委員から「教育学専攻としてどこに重点を置いているのか、どこに特色を求めているかがよくわからない」との指摘を受けた。今後は３ポリシーの記述などを通して特色を明らかにすることをめざす。

第３に「授業振り返りシート」の活用方法であるが、これは経年的に 100%の回答を得ている。そして、これらは各教員や専修にフィードバックされているので、個別的な授業改善に活用されている。しかし、学生数が少ないところでは、必ずしもそのようになっていないようである。今後、教員・専修を越えた形で評価を行うように改善するとともに、少人数授業での回答方法についてより学生の本音が聞けるように改善していきたい。

その他の課題を列挙すれば、以下の通りである。

１　成績評価

受講生が 1 名という科目と、臨床心理学専修・英語教育専修のように多くの学生が受講する科目が混在している。これらの間で公平感のある評価ができるように改善する必要がある。

２　文学研究科評価分科会の学生参加

2019 年度から始めた制度であるが、参加学生数が少なかった。にもかかわらず、従来の「授業振り返りシート」では十分に伝わらなかった学生からの新たな意見が多かった。今後は、参加学生数を増やすように努力し、より広範で有意義な意見を聴取していきたい。その一方で、このような制度はまだ緒に就いたばかりであり、十分に機能しているとは言い難い。今後、さらに充実させていきたい。

３　博士論文審査の基準と水準

博士論文の審査基準について、現在ではいくつかの評価項目を提示している。これは博士論文という性質上、その論文が学術の発展に寄与できるか否か、提出者が自立した研究者であるか否か、が合否の重要な鍵になることを考慮すると、検討の余地がないともいえない。今後、修士論文・博士論文にふさわしい審査基準の設定、およびそれに基づいた具体的な採点方法を含めて検討したい。

４　国際言語教育専攻・日本語教育専修の学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性

日本語教育専修では、学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置に課題がわずかに残されている。それは、審査基準に基づいた採点の具体的な実施が課題であり、そのうえで最終試験の評点を決定する手続きについても明確になる必要があるように思われる。

（４）全体のまとめ

学生の意見聴取などいまだ十分に軌道に乗っていない点もあるが、本研究科は幅広い研究分野を有するにもかかわらず、統一的に運営されていると考える。しかし、今後の社会的ニーズの変化にも対応する必要がある。その一つが外国人学生の増加である。English Medium Program　の充実など、今後検討することが必要であろう。

【根拠資料】
4-1　https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/
4-2　https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/
4-3　『創価大学大学院要覧　2020 年度』131～122 頁。
4-4　『創価大学大学院要覧　2020 年度』222～223 頁。
4-5　『創価大学大学院要覧　2020 年度』225～226 頁。
4-6　『創価大学大学院要覧　2020 年度』161～166 頁。
4-7　各専攻・専修のアセスメントポリシーは、以下の WEB 上で公開されている。
英文学専攻　アセスメントポリシー
https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/english/
社会学専攻　アセスメントポリシー
https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/sociology/
教育学専攻　アセスメントポリシー
https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/education/
人文学専攻　アセスメントポリシー
https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/human/
国際言語教育専攻　日本語教育専修　アセスメントポリシー
https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/lang/
国際言語教育専攻　英語教育専修　アセスメントポリシー
https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/lang/

基準５　学生の受け入れ
（１）現状説明
点検・評価項目①　学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

評価の視点
〇学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表
〇下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定
・入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像
・入学希望者に求める水準等の判定方法

文学研究科では、本学の理念、および文学研究科の理念・目標・ディプロマ・ポリシーに沿い、各専攻・専修ごとに以下のようなアドミッション・ポリシーを掲げている。これらは、学生に向けて公表している冊子体の『創価大学大学院要覧』、『学生募集要項』の他、ウェブサイトで広く一般に公開している。（根拠資料 5-1）
＜英文学専攻＞
博士前期課程では、入学後には専門分野を研究し、その成果を英語で発表することが求められます。

したがって、自分がとくに何に関心をもち、何を研究したいのかを早めに決めておくことが大切です。また、英米文学、英語、文化、教育などについてなるべく広い知識及び応用力を身につけることが必要です。入学試験の「英語」では、一般的な英語力が問われ、専門科目は、自分の将来の専門に合わせて、イギリス文学、アメリカ文学、英語学から選択します。

博士後期課程では、高度な専門的職業人・創造的研究者の養成をめざし、博士論文の作成をもってその学業、研究の中心としていきます。入学試験（および進学選考試験）ではそうした高度な研究を推進しうる基礎力、応用力をもっているかどうかが問われます。

＜社会学専攻＞

社会学専攻は、創価大学のアドミッション・ポリシーに基づき、かつ本専攻のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに則って、本研究科の教育目標で示した人材へ成長する資質を備えた学生を、以下のように選抜します。

博士前期課程

1. グローバルな視野をもった専門的な職業人となるための学術的基礎を有すること。
   学内専攻試験及び一般入学試験で課される筆記試験を通して、受験者の知識・技能・思考力・判断力・表現力を評価する。
2. 創造的な研究者育成に適合する学術的基礎を有すること。
   全ての入学試験で課される面接試験を通して、受験者の学習意欲、多様性、表現力を評価する。

博士後期課程

1. グローバルな視野をもった専門的な職業人となるための本格的総合力を有すること。
   学内専攻試験及び一般入学試験で課される筆記試験を通して、受験者の知識・技能・思考力・判断力・表現力を評価する。
2. 創造的な研究者育成に適合する本格的総合力を有すること。
   全ての入学試験で課される面接試験を通して、受験者の学習意欲、多様性、表現力を評価する。

＜教育学専攻＞

教育学専攻は、創価大学のアドミッション・ポリシーに基づき、本専攻のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに則って、本専攻の教育理念・目的を理解し、教育学・心理学に関する学部レベルの基礎的な学習能力を備えた学生を選抜するため、学位ごとに学生の学力や人間力を総合的に評価できる入学試験を実施します。

具体的には、以下の基本方針に基づき、入学試験を行います。

博士前期課程

1. 学内選考試験（5 月）、一般入学試験（9 月、2 月）を実施する。
2. 入学願書の志望理由によって、受験者の表現力・主体性・多様性を測定する。
3. 推薦書（学内選考試験のみ）によって、受験者の主体性・協調性を測定する。
4. 筆記試験（外国語と専門科目（教育学専修：教育学、臨床心理学専修：心理学（臨床心理学・発達心理学・教育心理学））を通して、受験者の専門的知識と思考力を測定する。
5. 面接を通して、受験者の表現力・主体性・多様性・協調性を測定する

博士後期課程

1. 進学資格試験・進学選考試験（2 月）を実施する。

2. 進学願によって、受験者の研究力・独創性・表現力・主体性・多様性を測定する。

3. 推薦書によって、受験者の研究力・独創性・協調性を測定する。

4. 筆記試験（英語）を通して、受験者の専門的知識と思考力を測定する。

5. 口頭試問を通して、受験者の専門的知識・研究力・独創性を測定する

＜人文学専攻＞

本専攻は、創価大学文学研究科の理念・目的、教育目標のもとに、「学力の重要な 3 つの要素」に関する学部レベルの基本的な学習能力を備えた学生を選抜します。そのために、以下の方針に基づいて入学試験を行います。

1　専修の基礎的・基本的な学力を備えている学生を選抜します。そのために、全ての試験において、外国語能力を含む専門的知識を備えた学生を選抜します。

2　各専修の知識を活用して、それぞれの分野で必要な思考力・表現力を備えた学生を選抜します。そのために、全ての試験において、文章で表現する能力を備えた学生を選抜します。

3　各専修の分野に対して、主体的に学習に取り組む態度を備えた学生を選抜します。そのために、全ての試験において、学習・研究にふさわしい態度を備えているかどうかの観点から学生を選抜します。

4　外国人入試においても、「学力の重要な 3 つの要素」をふまえて、本専攻の各専修において学習する能力を備えた学生を選抜します。

5　博士後期課程においては、より高度な研究を遂行しうる能力を備えた学生を選抜します。

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

日本語教育専修では、次の３つの条件にかない、そのために必要な基礎的能力を有する人を求めます。

1　グローバル化する国際社会において、責任ある立場で日本語指導を担うことができる専門的知識と実践的技能の修得を目指す人。

2　教育機関で専門的な日本語および国語の指導ができる言語教育の専門家を目指す人。

3　日本語教育・国語教育の実践の中で生まれた課題について、学問的な観点から探究し、 研究の一層の深化を目指す人。

以上の三つの観点から入学試験を実施します。一般入試では、筆記試験の専門科目により日本語学・日本語教育における基礎知識・技能を評価し、外国語科目により外国人学生は日本語指導が可能な水準の日本語能力、日本人学生は学問的探究が可能な水準の外国語能力を評価します。面接では、目的意識、研究計画、学問探究の資質等を評価します。外国人入試においては出願資格として日本語能力検定試験 N1 合格を求めたうえで、一般入試の筆記試験および面接と同内容・同水準の口述試験を実施し、評価します。

＜国際言語教育専攻・英語教育専修＞

英語がコミュニケーション・商業・外交活動の言語として世界的に利用される機会が増大した結果、英語学習・教育は教育機関や国家・地域行政において重要な位置を占め続けています。英語教育界ではこれまでにも増して優秀な英語教師を輩出する必要に迫られています。国際言語教育専攻英語教育専修では優れた教授能力を教室で示すことができ、教育機関でも指導力を発揮できる人材の輩出を主たる目的としています。

本専修はさまざまな状況において、異なる能力の学習者に効果的な指導ができる英語教師の育成を目指す、やりがいのある、すべての授業が英語で行われる大学院プログラムです。指導経験や教育に関する知識を有していることは望ましいのですが、英語教育専修では異なる背景を持つ志願者を歓迎し、すべての志願者を全体観に立って選考します。

以下の特性を複数兼ね備えた志願者を歓迎します。

1　教えることに対する熱意・情熱　　志望理由書・面接によって評価します。

2　一定の成績を持って学士号を取得している（GPA3.0［5 点満点］程度、 英文学や教育学でなくてもよい。他の分野も考慮する。）　　成績証明書によって評価します。

3　英語で行われる授業についていける英語力(iBT で 71 点または IELTS で 6.0 程度あれば応募可。iBT80 点、IELTS6.0 以上であることが望ましい。)　　iBT または IELTS のスコアおよび面接によって評価します。

4　英語教育専修で学ぶことが、自身の職業上の目標を実現する上でどのように役立つのか理解していること。　　志望理由書・面接によって評価します。

選考においては、志願者を一つの基準によってのみ判定するのではなく、志願者の特徴や、教育上の目標と英語教育専修での学業の内容が合致しているかなどを含め、総合的に判定します。なお、英語教育専修では外国人にも広く門戸を開いています。そのため、外国人の志願者も日本人志願者と同様に一般入試に出願していただきます。従って、外国人のみを対象とした外国人入試は行いません。

点検・評価項目②　学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

評価の視点
○学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定
○授業その他の費用や経済的支援に関する情報提供
○入試委員会等、責任所在を明確にした入学者選抜実施のための体制の適切な整備
○公正な入学者選抜の実施
○入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜の実施

学生募集・入学者選抜に関しては、アドミッションポリシーに基づき、冊子『学生募集要項』に詳細に掲載している。文学研究科では、一般入試第Ⅰ～Ⅲ期、学内選考、と多岐に亘る入学者選抜制度を用意し、さらに社会人・外国人受験者に対しては彼らのキャリアを考慮して、記述問題のみならず、推薦書、面接など多様な組み合わせで選抜を実施している。このようにして、多面的に多彩な人材を募集することに努めている。

具体的な試験の実施方法は専攻ごとに異なるが、たとえば以下の通りである。

＜英文学専攻＞

博士前期課程では、入学後には専門分野を研究し、その成果を英語で発表することが求められている。また、英米文学・英語・文化・教育などについてなるべく広い知識及び応用力を身に付けることが必要となる。よって、入学試験の「英語」では、まず一般的な英語力が問う。また、専門科目として、各自の将来の専門に合わせてイギリス文学・アメリカ文学・英語学から選択してもらい、それぞ

れの基礎的な知識を問うことにしている。

一方、博士後期課程では、高度な専門的職業人・創造的研究者の養成を目指し、博士論文の作成をもってその学業・研究の中心としていく。よって、入学試験（および進学選考試験）では、そうした高度な研究を推進しうる基礎力・応用力を持っているかどうかを問うことにしている。

それぞれの入学者選抜にあたっては、文学研究科委員会の審議を経て選任された委員が問題作成・試験監督・採点・面接を担当して合否の原案を作り、最終的な合否の決定は文学研究科委員会の全体の議決を経て為されている。

＜社会学専攻＞

「学生募集要項」で、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを公表し、学生募集方法及び入学者選抜制度を周知している。また、同要項で、授業その他の費用や経済的支援に関する情報提供を行っている。

公正な入学者選抜を行うため、大学院委員が責任をもって入試を実施する体制をとっている。入学希望者への合理的な配慮についても、本人の出願時の申告に基づき公平な入試を実施する体制にある。

＜教育学専攻＞・＜人文学専攻＞

学生募集要項で、3 ポリシーを公表し、学生募集方法、及び、入学者選抜制度を周知するとともに、奨学金制度を紹介している。公正な入学者選抜を行うため、問題作成・試験監督・採点・面接の担当者は文学研究科委員会の審議を経て選任される。担当者の合議の上で合否の原案を作り、最終的に文学研究科委員会の議決によって合否が決定される。出願時に申告があれば、合理的な配慮に基づき、入試を実施する。

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

学生募集及び入学者選抜の制度については以下の通り、公表している。

学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の観点から、入学試験を実施します。一般入試では、筆記試験の専門科目により日本語学・日本語教育における基礎知識・技能を評価し、外国語科目により外国人学生は日本語指導が可能な水準の日本語能力、日本人学生は学問的探究が可能な水準の外国語能力を評価します。外国　人入試においては出願資格として日本語能力検定試験Ｎ１合格を求めたうえで、一般入試の筆記試験および面接と同内容・同水準の口述試験を実施し、評価します。

また、入学者選抜を公正に実施するため、複数の教員による入学試験問題の作成と採点を行っている。そして、外国人入試と一般入試の公平を期すため、本試験の口述試験（ルーブリック評価）の他に、事前提出されている出願書類や研究計画書についてもルーブリック評価を用いて専修教員全員で評価点を付けている。

＜国際言語教育専攻・英語教育専修＞

英語教育専修では、学生の受け入れ方針に基づき、専修が求める特質を備えているかどうかを、志望理由書、面接、成績証明書、TOEFL iBT や IELTS のスコアにより判定する。志望理由書、成績、英語テストスコアにおいて一定基準を満たしている者に対し面接を課す。面接では専修で学ぶ目的をはじめ、興味のある研究分野、大学院修了後の進路など仔細に尋ね、院生として学ぶにふさわしい思考、表現能力があるかを見極める。評価には志望理由書、面接双方にルーブリックを用いる。選考過程では偏った評価にならないよう、複数の教員が関わる。専修の教育に関する情報は専修のホームページから参照可能である。紙媒体によるパンフレットも請求に応じて配布している。

点検・評価項目③　適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

評価の視点
○入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理
・入学定員に対する入学者数比率（【学士課程】）
・編入学定員に対する編入学生数比率（【学士課程】）
・収容定員に対する在籍学生数比率
・収容定員に対する在籍学生数の過剰又は未充足に関する対応

学生収容定員は、教員スタッフの規模と連動する形で、適正に創価大学大学院学則で定められ、冊子『創価大学大学院要覧』等で公開されている。(根拠資料 5-2)

本研究科では、学生定員を専攻ごとに割り振っている。そのため、専攻・専修によって差が生じるが、入学者数を入学定員で割った入学定員充足率を全体でみれば、過去 5 年間の平均が博士前期・修士課程で 60%、博士課程で 21%となっている。(根拠資料 5-3)

例えば、以下の通りである。

＜英文学専攻＞

合否の判定に際しては入学定員および収容定員を超えることがないよう、常に配慮が為されている。

＜社会学専攻＞

社会学専攻：博士前期課程の入学定員 10 人・収容定員 20 人、博士後期課程の入学定員５人・収容定員１５人、合計収容定員 35 人。

博士前期課程・収容定員充足率：0.50（2016 年度）、0.45（2017 年度）、0.30（2018 年度）、0.25（2019 年度）、0.45（2020 年度）

博士後期課程・収容定員充足率：0.40（2016 年度）、0.27（2017 年度）、0.40（2018 年度）、0.33（2019 年度）、0.33（2020 年度）

博士前期・後期課程ともに収容定員に対する在籍学生数比率は１を超えない状態が続いていて、学生に対する指導は十分に提供されていると思われる。

＜教育学専攻＞

合否判定に際しては、入学定員および収容定員を超えることがないよう配慮している。

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

文学研究科委員会において審議のうえ定員におさまるよう入学者選抜試験の合否判定を出している。

点検・評価項目④　学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点
○適切な根拠（資料、情報）に基づく定期的な点検・評価
○点検・評価結果に基づく改善・向上

前述のように、定員充足率には十分の余裕があるので、現状では特に問題がないと考えている。むしろ、優秀な人材を獲得するために、学内では進学説明会、学部学生参加の院生中間報告発表会を開催し、学外に向かっては『学生募集要項』の配布、WEB 上での「募集要項」「入学書類」の掲載(根拠資料 5-4)、入試問題の公表(根拠資料 5-5)などを行っている。

各専攻の具体的な対応は以下の通りである。

＜英文学専攻＞

定員については未充足の年度が続いているが、学内で文学研究科全体の進学説明会を開き、英文学専攻からも担当教員が出席して広く学部生に大学院の魅力を伝えるよう努力している。英文学専攻は、国内外の大学に専任・非常勤を含めて多くの大学教員を輩出している他、中学校・高等学校等にも英語科教員を多数送り出している。一般企業に就職する者や公務員になる者もあるが、やはり教育分野での活躍が際立っていると言えよう。英米文学と英語学、一方に偏ることなく、オールラウンドな視点に立って研究を積み上げた成果が、教育分野で大いに役立っていることは間違いない。こうした魅力を学部生に強く訴えているところである。また、2018 年に通信教育課程を開設した文学部は 2021 年度に完成年度を迎えるが、仕事をリタイアした年齢の学生たちの中には、通信教育を通して英米文学への興味関心を深める者も少なくない。生涯教育の観点から、英文学専攻への進学も選択肢の一つとして提案していくことができればと考えている。

＜教育学専攻＞

定員については未充足の年度が続いているが、教育学専攻の担当教員が、教育学部生を対象に進学を促している。特に、臨床心理学専修については、早い段階から進学を志望する学生が少なくないため、十分な力を付けることができるよう、演習科目においてトレーニングしている。

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

受け入れた学生の、入学後の勉学・研究に関する能力や技能についての評価を教員間で共有するようにしており、受け入れが適切であったかを振り返っている。

また、文学部の関連授業（日本語教授法、日本語教育概論など)、また文学部の「日本語教育プログラム・ガイダンス」において、大学院の紹介や進学の勧めを行ない、定員の充足に努めている。

（２）長所・特色

本学がスーパーグローバル大学に指定されたことをうけ、外国人留学生の授業料などに大きな特典を与えた影響で、一時は国際言語教育専攻などに多くの受験者が押し寄せ、入学定員充足率を上回る事態が生じたが、現在ではそれも収まり、学生一人ひとりに十分な教育が行き届いていると思われる。

また、本研究科の入学者選抜試験は多彩であり、これによって多様な人材を獲得できていると考えている。

（３）問題点

しかし、その一方で教育学専攻臨床心理学専修と国際言語教育専攻を除けば、学生数が若干少ない点に改善する余地があると考えている。外部評価委員からも「博士前期課程だけをみても、経年的にみて、国際言語教育専攻を除いて入学定員未充足の状態が続いている。定員充足にむけた取り組みが必要である」との指摘を受けた。これを改善するために、学内進学説明会を開催というような消極的なものではなく、

例えば点検・評価項目④にあるように、英文学専攻では多くの教員を輩出するなど、卒業生の就職実績や社会での活躍ぶりをアピールする必要があると考えている。今後は、卒業生の卒業後の動向などをきめ細かく調査して、このような社会に向けての積極的にアピールしていきたい。

その他最近では、日本語能力が十分でないが、博士後期課程に進学を望む外国人留学生も存在する。今後、どのように対応するか検討が必要である。

（4）全体のまとめ

学生の受け入れは、現時点では特に問題がないと考えている。ただし、日本人学生の増加、国際化への対応など、さらなる検討が必要であろう。

【根拠資料】

5-1　https://www.soka.ac.jp/department/policy/bunkei/

5-2　『創価大学大学院要覧』257 頁。

5-3　過去 5 年間の入学定員・入学者数・在籍学生数は以下の通り。

創価大学大学院文学研究科・専攻別・入学者数

専攻名	項目	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度	入学定員に対する平均比率
英文学専攻	入学者数	2	1	1	0	0	0.08
	入学定員	10	10	10	10	10	
	入学定員充足率	0.20	0.10	0.10	0.00	0.00	
	在籍学生数	4	3	3	2	1	
	収容定員	20	20	20	20	20	
	収容定員充足率	0.20	0.15	0.15	0.10	0.05	
社会学専攻	入学者数	6	2	4	1	8	0.42
	入学定員	10	10	10	10	10	
	入学定員充足率	0.60	0.20	0.40	0.10	0.80	
	在籍学生数	10	9	6	5	9	
	収容定員	20	20	20	20	20	
	収容定員充足率	0.50	0.45	0.30	0.25	0.45	
教育学専攻	入学者数	14	11	8	9	8	0.67
	入学定員	15	15	15	15	15	
	入学定員充足率	0.93	0.73	0.53	0.60	0.53	
	在籍学生数	26	27	19	19	17	

	収容定員	30	30	30	30	30	
	収容定員充足率	0.87	0.90	0.63	0.63	0.57	
人文学専攻	入学者数	4	3	2	2	4	0.38
	入学定員	8	8	8	8	8	
	入学定員充足率	0.50	0.38	0.25	0.25	0.50	
	在籍学生数	6	8	6	4	6	
	収容定員	16	16	16	16	16	
	収容定員充足率	0.38	0.50	0.38	0.25	0.38	
国際言語教育専攻	入学者数	21	23	16	15	10	1.13
	入学定員	15	15	15	15	15	
	入学定員充足率	1.40	1.53	1.07	1.00	0.67	
	在籍学生数	32	46	45	36	36	
	収容定員	30	30	30	30	30	
	収容定員充足率	1.07	1.53	1.50	1.20	1.20	
文学研究科全体	入学者数	47	40	31	27	30	0.60
	入学定員	58	58	58	58	58	
	入学定員充足率	0.81	0.69	0.53	0.47	0.52	
	在籍学生数	78	93	79	66	69	
	収容定員	116	116	116	116	116	
	収容定員充足率	0.67	0.80	0.68	0.57	0.59	

専攻名	項目	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	入学定員に対する平均比率
英文学専攻	入学者数	1	0	1	0	0	0.08
	入学定員	5	5	5	5	5	
	入学定員充足率	0.20	0.00	0.20	0.00	0.00	
	在籍学生数	2	1	2	2	3	
	収容定員	15	15	15	15	15	
	収容定員充足率	1.00	0.07	0.13	0.13	0.20	
社会学専攻	入学者数	1	0	2	1	1	0.20
	入学定員	5	5	5	5	5	
	入学定員充足率	0.20	0.00	0.40	0.20	0.20	

	在籍学生数	6	4	6	5	5	
	収容定員	15	15	15	15	15	
	収容定員充足率	0.40	0.27	0.40	0.33	0.33	
教育学専攻	入学者数	0	1	2	2	1	0.60
	入学定員	2	2	2	2	2	
	入学定員充足率	0.00	0.50	1.00	1.00	0.50	
	在籍学生数	5	5	5	7	8	
	収容定員	6	6	6	6	6	
	収容定員充足率	0.83	0.83	0.83	1.17	1.33	
人文学専攻	入学者数	1	0	2	1	0	0.20
	入学定員	4	4	4	4	4	
	入学定員充足率	0.25	0.00	0.50	0.25	0.00	
	在籍学生数	4	3	3	4	3	
	収容定員	12	12	12	12	12	
	収容定員充足率	0.33	0.25	0.25	0.33	0.25	
文学研究科全体	入学者数	3	1	7	4	2	0.21
	入学定員	16	16	16	16	16	
	入学定員充足率	0.19	0.06	0.44	0.25	0.13	
	在籍学生数	17	13	16	18	19	
	収容定員	48	48	48	48	48	
	収容定員充足率	0.35	0.27	0.33	0.38	0.40	

5-4　https://www.soka.ac.jp/admissions/exam-info/graduate/bunkei/

5-5　https://www.soka.ac.jp/admissions/exam-info/past_test/graduate/bunkei/

基準６　教員・教員組織

（１）現状説明

点検・評価項目①　大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部･研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

評価の視点

〇大学として求める教員像の設定

・各学位課程における専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等

〇各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針（分野構成、各教員の役割、連携のあり方、教育研究に係る責任所在の明確化等）の適切な明示

教員像は、大学として「求める教員像」を明示している。「教員組織の編成方針」も大学として明示し

ている。文学研究科では、その「バランスを考慮しながら、〔略〕必要な教員を配置する」「組織的な教育研究を行うために、〔略〕適切に教員の役割を分担する」「広く国内外に人材を求め、年齢・性別構成及び社会実践経験等の有無に配慮する」との方針に基づき運用している。

また、明示はしていないが、たとえば各専攻の方針は以下の通りである。

＜英文学専攻＞

英文学専攻には、英語英米文学専修としてイギリス文学・アメリカ文学・英語学・英語教育学の領域にわたって研究ができるよう、上記各領域にそれぞれを専門とする教員を配している。

＜教育学専攻＞

教育学専修には、教育学の全般にわたって教育できるよう、教育方法学、教育心理学、教育社会学、教育行政学、比較・国際教育学、教科教育学、教育工学を専門とする教員を擁している。また、臨床心理学専修には、臨床心理士を養成するために、臨床心理学、発達臨床心理学、学校臨床心理学、精神分析学、精神保健学を専門とする教員を擁している。

＜人文学専攻＞

人文学専攻における哲学歴史学・日本文学日本語学・仏教学の３専修の領域において、適切な専門能力を備えた教員を配置できるよう努めている。

＜国際言語教育専攻・日本語教育専修＞

専攻および専修における教育目標、カリキュラム・ポリシーに即して教員組織を編成している。専任教員は文学部の教員が多いが、その他、日本語教育や国語教育の教授技能や教育現場に関する専門性を高める、創価大学内の日本語・日本文化センターや教職大学院の教員を含めた編成をしている。

点検・評価項目②　教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

評価の視点
○大学全体及び学部・研究科等ごとの専任教員数
○適切な教員組織編制のための措置
・教員組織の編成に関する方針と教員組織の整合性
・各学位課程の目的に即した教員配置
・国際性、男女比
・特定の範囲の年齢に偏ることのないバランスのとれた年齢構成への配慮
・教育上主要と認められる授業科目における専任教員（教授又は准教授）の適正な配置
・研究科担当教員の資格の明確化と適正な配置
・教員の授業担当負担への適切な配慮
○教養教育の運営体制

１　教員数と編成方針

文学研究科では、前述の編成方針に基づき、専攻別に以下のような構成となっている。

創価大学大学院・文学研究科　専攻別教員内訳				
	教員数	後期課程担当者数	外国人教員数	女性教員数
英文学専攻	6	5		2
社会学専攻	12	9	1	3
教育学専攻	17	9		5
人文学専攻	16	13		1
国際言語教育専攻	16		6	3
合計	67	36	7	14

教員数において英文学専攻が若干少ないこと、外国人教員には専攻によって差があること、年齢構成が比較的高いこと、などの問題はあるが、全体として十分に充足しており、かつバランスもとれていると考える。

また、教員配置も、以下の専攻別の通り、バランスが取れている。

＜英文学専攻＞

現在、博士前期課程には 6 人の専任教員が在籍している。全員が教授である。イギリス文学・アメリカ文学・英語学・英語教育学の領域にわたって研究ができるよう、上記各領域にそれぞれを専門とする教員を配している。教員 6 人のうち男性教員が 4 人、女性教員が 2 人となっている。

博士後期課程には上記 6 人中 5 人の専任教員が在籍している。男性教員が 3 人、女性教員が 2 人である。

＜社会学専攻＞

・専任教員数は 12 名で、その内博士取得者 7 名である。

・博士前期課程は社会学研究とグローバル・スタディーズの２領域からなり、両者の協同によって、教育・研究を進めている。 社会学研究としては、方法論科目を置き、グローバル・スタディーズとしては、地域研究（Area Studies）科目をおき、特に 「中国・アジア研究」「ロシア・ユーラシア研究」に重点を置いた研究指導を行っている。

・方法論科目担当教員は、井上大介（文化人類学）、寒河江光徳（言語研究）、小林和夫（歴史社会学、都市科学）、渋谷明子（社会心理学）、筒井澄栄（社会福祉学）、林亮（国際社会論）、森幸雄（都市社会学）の 7 名で、その内博士取得者６名である。

・地域研究科目担当教員は、「ロシア・ユーラシア研究」江口満、小崎晃義、「中国・アジア研究」高橋強、樋口勝、武澎東の 5 名で、その内博士取得者１名である。

・教員の配置から考えると、社会学の方法論を十分に身に着けた学生が、社会学研究とグローバル・スタディーズの領域で研究を深めることが可能であるということが出来る。

・教育上主要と認められる授業科目には、専任教員でなおかつ教授が適正に配置されている。

＜教育学専攻＞

博士前期課程については、教育学専修には、専任教員は 10 名（女性 2 名、博士号取得者 8 名、教授 7 名、准教授 3 名）が、臨床心理学専修には、専任教員は 6 名（女性 3 名、博士号取得者 1 名、教授 4 名、准教授 2 名）、兼任講師 8 名が、それぞれ在席している。

博士後期課程には上記の内、教授 10 名（女性 2 名、博士号取得者 6 名）が在席している。

＜人文学専攻＞

人文学専攻における哲学歴史学専修・日本文学日本語学専修・仏教学専修の３専修の領域において、適切な専門能力を備えた教員を配置できるよう努めている。また、３専修の領域において、教員が配置できている。

・専任教員数は 16 名であり、哲学歴史学専修７名（内、後期課程６名）、日本文学日本語学専修４名（後期課程専任１名を加えて後期課程４名）、仏教学専修５名（内、後期課程３名）の組織である。

・方法論や教育上の主要科目には専任教員が配置されている。

点検・評価項目③　教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

評価の視点
○教員の職位（教授、准教授、助教等）ごとの募集、採用、昇任等に関する基準及び手続の設定と規程の整備
○規程に沿った教員の募集、採用、昇任等の実施

本研究科に所属する教員は大きく分けて二つに分類される。第一は大学院専任教員で、人文学専攻に 6 名在籍する。第二は、本学文学部・教育学部の教員の中から大学院担当を選任する場合で、多くの教員はこれに属する。専任教員を公募したことは現在までないが、採用基準、選任基準は専任教員、選任教員いずれも同じで、「創価大学大学院教員選任基準」によって定められている。

その概要を挙げれば、

【博士前期課程担当】

（ア）　教授である者

（イ）　准教授として 3 年以上の教歴または同等以上の研究歴を有し、かつその担当する専門分野について最近における研究上の業績が相当顕著な者

※　「最近における」とは、前回選任人事以降もしくは過去 3 年以内とする

※　「研究上の業績」とは、著作１＋論文 3、または論文 6 を基準とする

【博士後期課程担当】

教授の教歴（ただし、博士前期課程担当 2 年以上の教歴）、または同等以上の研究歴を有し、その担当する専門分野について博士の学位（または同等以上の顕著な研究業績）を有した上、最近における研究上の業績が極めて顕著な者

※　「研究上の業績」とは、著作１＋論文 3、または論文 6 を基準とする

となる。

本研究科では、人事委員を置き、人事委員からの提案に基づいて選任人事を開始し、本研究科委員会において、審査開始→業績審査委員選定→業績審査報告→投票、という手順に従って決定する。さらに、大学全体の大学院委員会において最終的に採用を決定する。

以上の規定は厳格に運用されている。

点検・評価項目④　ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。

評価の視点
○ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）活動の組織的な実施
○教員の教育活動、研究活動、社会活動等の評価とその結果の活用

本研究科教員はほとんどが文学部・教育学部に属しており、学部のFD活動と重複する面が多い。既に両学部の項で述べたように、本学は積極的にFD活動を実施しており、その成果は教育方法やカリキュラム編成などに生かされている。

本研究科独自のものとしては、FD委員会および評価分科会委員により進められている。評価分科会への学生参加、アンケート調査、ルーブリック、授業振り返りシートを利用した授業評価などを参考に、様々な改革に取り組みつつある。始まってから時間が少ないので多くはないが、具体的な改善を挙げれば以下の通りである。

１．春学期提出の修士論文、リサーチ・ペーパーの提出期日の変更

２、国際言語教育専攻英語教育専修におけるリサーチ・ペーパーの取り扱いの変更

３．修士論文、リサーチ・ペーパーの点数の専攻間の標準化

４、コースワークに担当教員以外も参加することによる相互啓発

そのほか、専攻単位での活動は以下の通りである。

＜英文学専攻＞

文学研究科単独のものではないが、大学や学部と連携してFD関連の種々の講演会やワークショップを適宜開催し、教員が年間3回以上参加することを義務付けている。

また、教育活動、研究活動、社会活動等を年度末にウェブ上で各自登録することで報告させ、各項目を点数化して、高得点者を表彰する枠組みができあがっている。

＜社会学専攻＞

社会学専攻では、時代的要請や志願者の動向に合致したカリキュラムの検討について、会議を実施している。しかし、FD活動や教員の相互評価の活動としては必ずしも十分とはいえないので、今後改善をはかりたい。

＜教育学専攻＞

教育学部において、学部AP事業推進委員会による研究会が年10回ほど開催されている。また、この研究会や同僚会議を含め、大学内外のFD関連の講演会やワークショップに、年3回以上参加することを義務付けている。

＜国際言語教育専攻＞

教員業績登録システムを利用している。また、《国際言語教育専攻》日本語教育専修の教員は、創価大学の紀要に毎年、研究活動報告を掲載している。このことで一年間の各自の研究活動の総括を行い、自己点検している。他に、毎年秋に、創価大学日本語日本文学会の大会を開催し、研究発表ならびに他大学から講演者を呼び学術講演会を開催している。《国際言語教育専攻》日本語教育専修の教員は全員、大会の運営に携わるとともに、講演会に参加している。

点検・評価項目⑤教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点
○適切な根拠（資料、情報）に基づく定期的な点検・評価
○点検・評価結果に基づく改善・向上

この点に関しては、専攻・専修が主体となって検討し、さらに研究科長・人事委員とともに、日常的に話し合いの場が持たれている。特に、教員の負担が過重にならないように経年的に点検している。具体的な例として、つぎの２点を挙げる。

＜人文学専攻＞

従来、教員構成上で問題のあった人文学専攻では、この数年著しく改善された。すなわち、学生数の割に教員が少なかった仏教学専修では、4 名の新たな専任教員が補充された。また、前任の教員が退職したため不開講科目が目立った歴史哲学専修では、やはり 2 名の専任教員が補充された。これらは、文学研究科長・人事委員・専修所属教員の定期的な打ち合わせに基づき、大学側に要望して実現した。

＜教育学専攻＞

臨床心理学専修では、公認心理師に対応するため、実習体制について検討した。実習時間、実習先、実習指導方法についての見直しを行い、新たな体制を整備し、7 月には厚労省からも承認された。教育体制の強化のための専任教員として、2020 年度から毛利先生が着任された。まだ検討中の課題も多くあることから、月に 1～2 回、臨床心理学専修スタッフミーティングを開き、継続的に検討している。特に、新型コロナ感染症対策を踏まえた実習実施については検討を重ね、学生、実習先の関係者、教員等の安全を確保するために、体調管理のシステム、安全に配慮した実習指導のシステムを整えた。

（２）長所・特色

本研究科では、厳格な教員専任・選任基準に従って教員採用が行われ、かつ十分な教員数を誇っている。それゆえに、多彩な科目が用意され学生の要望に対応しうるように整備されていると考えている。

（３）問題点

ただし、定年などの関係で偏りが生じる場合が起こることは致し方ない。近年では英文学専攻での教員数が不足しつつあり、現在、大学側と協議を行って改善を図りつつある。

また、国際言語教育専攻・日本語教育専修からも、つぎのような意見が出されている。

> 研究科大学院の担当科目数や担当コマ数については適切な数を検討している。しかし、一人の教員が担当する科目数（コマ数）は一つの組織におけるものだけではなく、大学院、そして学部、加えて創価大学には通信教育部もあるため、それら全ての担当科目数勘案し、教育研究活動を展開するためのより適切な教員組織の編成を今後考えていく必要があると思われる。

本研究科では、研究科長と３名の人事によって構成される人事委員会が、各専攻・専修あるいは学部と連携して常時評価する体制を取っているが、今後はより計画的に進めていきたい。

（４）全体のまとめ

現在のところ、特に大きな問題点はないと考えているが、今述べたようにより計画的に教員組織を整えていきたい。そのためには、一度各専攻と協議し、長期的な方針を立てる必要があると思われる。

基準７　学生支援

点検・評価項目②　学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

評価の視点
○学生支援体制の適切な整備
○学生の修学に関する適切な支援の実施
・学生の能力に応じた補習教育、補充教育
・正課外教育
・留学生等の多様な学生に対する修学支援
・障がいのある学生に対する修学支援
・成績不振の学生の状況把握と指導
・留年者及び休学者の状況把握と対応
・退学希望者の状況把握と対応
・奨学金その他の経済的支援の整備
・授業その他の費用や経済的支援に関する情報提供
○学生の生活に関する適切な支援の実施
・学生の相談に応じる体制の整備
・ハラスメント（アカデミック、セクシュアル、モラル等）防止のための体制の整備
・学生の心身の健康、保健衛生及び安全への配慮
○学生の進路に関する適切な支援の実施
・キャリア教育の実施
・学生のキャリア支援を行うための体制（キャリアセンターの設置等）の整備
・進路選択に関わる支援やガイダンスの実施
・博士課程における、学識を教授するために必要な能力を培うための機会の設定又は当該機会に関する情報提供
○学生の正課外活動（部活動等）を充実させるための支援の実施
○その他、学生の要望に対応した学生支援の適切な実施

学生支援は基本的に全学共通して実施しているので、ここでは詳述しない。ただし、そのうち、本研究科が運用にあたっているものは以下の通りである。

１　外国人留学生に対する経済的支援

以前、本学では外国人大学院生に対し、授業料全額免除・奨学金給与と優遇してきたが、学生数も多くなり、その実施が次第に困難になった。そこで新たにTAⅢ種という枠を作り、TAをしながら従来通りの経済的支援をうけられる制度を構築した。

２　「創価大学大学院学生学会発表補助金支給規程」(根拠資料7-1)に基づき、大学院生が国内外の学術会議で発表した際には補助を与えている。

３　「創価大学大学院研究奨励金制度運用内規」(根拠資料7-2)に基づき、査読付き論文を発表した際

に補助を与えている。

なお、2020 年度に関しては、covid-19 の影響で多くの授業ではオンライン授業を実施した。その結果、海外に居住する留学生に対しても従来と同様の教育を施すことができた。

点検・評価項目③　学生支援の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点
○適切な根拠（資料、情報）に基づく定期的な点検・評価
○点検・評価結果に基づく改善・向上

前述した評価分科会への学生参加、アンケート調査では、学生支援についても取り扱っているので、定期的に点検・評価を行っているといえる。

（２）長所・特色

本研究科には社会学専攻・教育学専攻・国際言語教育専攻において多くの外国人学生が在籍しているが、彼らに対し手厚い経済的支援を行っている。その他、寮・自習室などの面でも支援を与えている。また、さまざまな方法で学生の声を聴いている。

（３）問題点

まだ、学生の声を定期的に聴くようになって日が浅いので、十分な効果とまではいっていない。今後、さらに充実させていくことが必要である。

（４）全体のまとめ

全体としては、大きな問題はないと考えている。

【根拠資料】
7-1　『創価大学大学院要覧　2020 年度』238 頁。
7-2　『創価大学大学院要覧　2020 年度』240 頁。

基準９　社会連携・社会貢献

点検・評価項目②　社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。

評価の視点
○学外組織との適切な連携体制
○社会連携・社会貢献に関する活動による教育研究活動の推進
○地域交流、国際交流事業への参加

教育学専攻臨床心理学専修の教員・学生は、本学が運営している心理教育相談室に携わっている。この相談室は、臨床心理士・公認心理師・精神科医の資格を持つ大学教員と、大学院生を含む相談室カウンセラーがチームを組み、一般市民を対象に様々な心の問題や人間関係での悩み、子供の発育についてなど、日々の生活の中で困っていることへの相談に応じている。相談件数は、延べで年間 500 件ほどになっている。

国際言語教育専攻日本語教育専修では、学内の日本語・日本文化センターにおいて、院生の研究成果を現職の日本語教師に対して発表するというセミナーを開催し、調査・研究した成果を現場の教育に還元する機会を設けている。

点検・評価項目③　社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点
○適切な根拠（資料、情報）に基づく定期的な点検・評価
○点検・評価結果に基づく改善・向上

＜教育学専攻＞

臨床心理学専修では、大学外に開かれた「心理教育相談室」でカウンセリング等の心理援助を行っており、学生の研修施設ではあるが、社会貢献として位置づけられる。点検・評価のシステムとしては、毎年 1 回、文学研究科長主催で心理教育相談室運営委員会が開催されており、臨床心理専攻の教員と大学院係の事務方がメンバーとして参加し、審議、報告等を行っている。

昨年度末には、長く無料としてきた相談料を有料化することについて審議が行われ、2020 年度から相談料（カウンセリング、プレイセラピー他）一人一回につき 1000 円と改定し、利用者に周知した。理由は複数あるが、最大の理由は、有料とすることによって、利用者、学生の双方に対して“本相談室の相談は、専門性をもって行う心理援助の「契約」である”という意識を明確に持たせるためである。この点が明確化されることにより、学生の「専門職としての意識、責任感」がより高まること、また利用者にとっても「契約」関係であることによって、「無料で相談を受けている」ということで生まれかねない遠慮や負い目が軽減されることが期待でき、本学の心理援助職を養成する機関としての教育機能を高めると考えた。

（２）長所・特色

心理教育相談室は、前述のように、社会貢献という点で大きな成果を挙げている。

（３）問題点

社会連携・社会貢献は、いまだ一部の専修に限定されており、今後さらに拡大していく必要があると考えている。

（４）全体のまとめ

今後、従来のものをさらに発展させるとともに、幅を広げていきたい。

【根拠資料】

9-1　『心理教育相談室年報』。この年報は相談室が創設された 2003 年より毎年度刊行されている。